

論文

佐賀県佐賀市における徐福ゆかりの地とその伝説

華 雪 梅

HUA Xuemei

非文字資料研究センター 2017年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 秦の始皇帝の命を受け、不老不死の仙薬を探すために、徐福（ジョフク）が日本に渡来したという伝説は、日本最北の地 北海道から最南端の鹿児島県に至るまで、全国に伝承されている。本論文では、筆者がさまざまなロマンにあふれる佐賀県佐賀市の徐福ゆかりの地を訪れ、人々に語り継がれてきた徐福伝説の歴史と現状を考察する。地元で語り継がれている口碑と文字記録として残された史料などを併せて分析すると、徐福伝説が地元で盛んに流布されていた時代は、江戸時代であろうと推測される。

佐賀市には徐福に関わるさまざまな地名や事物、伝説がある。浮盃（ブバイ）・寺井・千布（チフ）という地名は、徐福伝説に由来するといわれ、古くから地元の人々に語り継がれてきた。事物としては、「徐福が持ってきた」といわれている樹齢2200年のビャクシンの古木がある。また、筑後川に生息する「エツ」という川魚は、葦の片葉が川面に落ちて生まれたという伝承や、徐福が見出した「フロフキ」という仙薬もある。伝説としては、徐福と地元の娘のお辰との悲恋伝説がある。地元の住民たちは、この伝説を熟知し、情熱を傾けて語り継いでいる。さらに、佐賀市に伝わる口碑によると、徐福は不老不死の仙薬を探すため、金立山に登り、地元の金立神社の祭神となったといわれる。往古から住民たちの信仰を集め、「金立大権現」と呼ばれて祭られている。このように徐福伝説は、佐賀市でさまざまな形で伝えられ、地元で融合し、生き生きと伝承されている。

民間伝承として伝わる徐福伝説は、関連する事物によって、地元の人々に記憶として刻み付けられている。特に、雨乞い行事と金立神社例大祭が行われる時期になると、徐福伝説にちなんだ事物は、その伝説に対する記憶を思い出す糸口となり、古くからの徐福信仰の記憶を呼び戻しながら、また新たな信仰の記憶を構築する。本論文は佐賀県佐賀市の徐福伝説にまつわる事物の調査や、地元の人々に対する聞き取り調査を基に、徐福伝説が佐賀市で定着し、語り継がれている背景や要因と、その伝承形式を明らかにするものである。

Legends and Places Remembered in Connection with Xu Fu in Saga City

Abstract: Tradition has it that a court sorcerer named Xu Fu traveled to Japan to find the elixir of life at the command of Qin Shi Huang. This legend has been passed down from generation to generation throughout the country, from Hokkaido in the north to Kagoshima in the south. This paper examines how the legends surrounding Xu Fu have been handed down through oral tradition until today, based on the findings of the author's visits to places imbued with romantic tales about this fabled figure in Saga City, Saga Prefecture. From an analysis of local folklore and written historical records, the legends of Xu Fu are believed to have circulated most widely in this

area during the Edo period.

Various place-names, objects, and legends in Saga City have some connection with Xu Fu, and the locals have claimed for ages that the names of places such as Bubai, Terai, and Chifu have their roots in these legends. Among the many objects connected with Xu Fu is a 2,200 year-old Chinese juniper said to have been planted by the wizard himself. Another example is “etsu,” the Japanese grenadier anchovy that inhabits the Chikugo River, which tradition says was born from a reed’s leaf plucked by Xu Hu that fell to the water’s surface. There is also the mythical medicinal herb called “furofuki,” the elixir supposedly discovered by Xu Fu in the area. As far as the actual legends are concerned, there is the story of his tragic love affair with a local girl named Tatsu. This tale is well known to Saga residents, who have passed it down fervently for generations. Another legend told in Saga City is that Xu Fu climbed Mount Kinryu to look for the elixir and became a deity enshrined in the local Kinryu Shrine. As the incarnation of Buddha, he has been embraced and worshiped by local residents from ancient times. As described above, the legends of Xu Fu have been actively handed down in various forms and integrated into the everyday life of the locals.

Xu Fu folklore has been etched into the local people’s memory through objects that serve as reminders. For example, when the locals hold the ritual to pray for rain or during the Kinryu Shrine festival, particular objects associated with the legends call to mind stories about the sorcerer, with the locals recollecting and renewing their memories of the long-standing beliefs in Xu Fu. Based on research of the objects connected with the Xu Fu legends and interviews with local people in Saga City, this paper aims to explain why and how these legends took root and have been passed down for generations in this city.

はじめに

徐福は、中国の秦朝（紀元前3世紀）の方士⁽¹⁾である。徐福に関しては、司馬遷の『史記』に記録されている。それによれば、徐福は秦の始皇帝の命を受け、3000人の童男童女と百工（技術者）を連れ、不老不死の仙薬を求めるために、東海の三神山（蓬萊・方丈・瀛州）へと出航した。しかしながら、徐福は「平原広沢を得て王となり帰らず」といわれており、故国には帰らなかったとされている。『史記』に記された「平原広沢」とは一体どこなのかについては、国内外の歴史学・考古学・民俗学などの学術分野の研究者の間で、盛んに論争が起きている。

徐福は、秦の始皇帝の命を受け、膨大な船隊を率いて、仙人が住むという三神山に船出したと伝えられている。その史料記録の内容は、時代によって変化している。徐福一行の渡海先は、紀元前1世紀に成立した『史記』には「平原広沢」とあるが、後の3世紀に成立した『三国志』では亶洲となっている。さらに、5世紀に成立した『後漢書』の「東夷列伝・倭伝」の中では、徐福一行が辿り着いた亶洲には「世世相い承けて数万家有り」（範 2005: 37）と記されている。注目すべきことは、徐福集団のことが「東夷列伝・倭伝」という項目に記録されているという点である。このことは、徐福一行が日本に辿り着いたという明白な記録ではないにしても、日本との繋がりが既にあったと考えられるからである。その後の歴史書では、徐福に関する記録に大きな変化はなかった。徐福一行の渡海先を具体的に日本であると最初に述べたのは、中国五代後周の僧侶義楚である。彼が書いた『義楚六帖』

(954年、『釈氏六帖』とも呼ぶ)の中に、徐福一行が日本の富士山に渡来したと記されている。

中国では、徐福を歴史的な人物として扱っているが、日本では伝説上の人物として扱われている。このことについて、梅原猛は「中国ではもうこのころ、前三世紀には、すでにきちんとした文字がありまして、徐福のことは書物にも書かれている。しかし前三世紀には、まだ日本には文字がなかったから」(梅原 2001: 530)と指摘している。こうした事情を考慮すると、徐福伝説を全般的に把握するためには、民間に伝えられている口承は言うまでもなく、文献として残された書承も分析しなければならない。特に、一般庶民が文字を書くことができない、また読めない時代では、知識人が書いた文献や図絵などが、当時の伝説や信仰などを記録する唯一の手段だと考えられるからである。

筆者は日本全国各地に分布する徐福伝説を収集し、地図(図1)にまとめた。日本全国の徐福渡来伝承地は20カ所以上ある。最北の北海道から最南端の鹿児島県に至るまで、徐福ゆかりの地が全国に点在している。2017年6月と2018年2月、筆者は遺跡数日本一(彭 1984: 253)の佐賀県の徐福ゆかりの地を訪れ、人々に語り継がれてきた徐福伝説の歴史と現状を考察した。筆者の現地調査と地元での聞き取り調査によると、佐賀市には数多くの徐福伝説にまつわる遺跡がある。徐福伝説に関する遺跡とは言い換えると、徐福伝説と関わりのある事物のことである。このような事物は伝説を思い出す端緒となり、梅野光興の述べている「記憶装置」という役割を果たしている。伝説の「記憶装置」



図1 日本の代表的な徐福ゆかりの地の分布図(筆者作成)

とは、伝説を思い出す契機になるものを指す。また、「記憶装置には、場所とその地名や木や石とその名前など空間認識に属するものと、習俗、儀礼などの集団の行なう身体活動がある。人びとの身のまわりの世界のありとあらゆるものが伝説の記憶装置になりうる」(梅野 2000: 215) と述べている。つまり、伝説はその信憑性を裏付けるために、しばしばその地域の事物と繋がるものである。

本論文は、徐福が日本に渡来したのかという史実を検討するものではない。佐賀県佐賀市に語り継がれている徐福伝説を取り上げ、この伝説の現在の様相をさまざまな視点から検討するものである。この伝説の様相を明らかにするためには、現在、語られている口碑だけでなく、歴史上の文献も併せて検討しなければならない。筆者は佐賀市において、伝説に関わる事物を調査し、地元の人たちに対する聞き取り調査を行った。さらに、それらの調査に歴史的文献の分析を加えて検討した。本論文では、佐賀市の徐福伝説がこの地に定着し、語り継がれている背景や要因、その伝承形式を明らかにする。

I 佐賀市徐福伝説の概要

(1) 徐福上陸地の2説

徐福一行の渡海について、中国には多くの出航伝説地がある。同様に日本でも渡来伝説地が多くある。徐福集団は3千人の童男童女や百工、千人の水夫らを同行させ、およそ5千人(呉 1988: 14)の膨大な船団であった。2000年前の航海技術では、徐福らが万里の波濤を越えて、思い通りに同じ所に辿り着く可能性は非常に低いと考えられる。柳田国男は伝説の特徴を次のように述べている。一つは、人々がこれを信じること。もう一つは、絶えず歴史化・合理化される傾向があること(柳田 1990:35 - 39)。日本の徐福渡来の伝説でも、このようなことが指摘できる。徐福ゆかりの地では人々は徐福の渡来のことを深く信じている。さらに、徐福伝説は歴史化し、合理化されている。日本全国で徐福上陸地と呼ばれる所が4、5カ所もある。同じ佐賀県でも徐福一行が初めて辿り着いたといわれている場所は2カ所存在する。そのことは伝説が各地で歴史化、合理化された証拠であると言えよう。

その一つは、伊万里の波多津から上陸して、黒髪山→武雄の蓬莱山→杵島三神山→竜王崎(船)→寺井津(テライツ)→金立山(キンリュウサン)という陸路で、仙薬を求めて探し歩いたと伝えられているルートである。また、佐賀県神埼郡の『金立山物語』の「徐福肥前国来訪」の記録によると、孝霊天皇72(紀元前219)年に、「秦始皇帝の第三皇子の徐福を長とする男女五百人からなる一行は、大船20隻で伊万里湾に上陸し、黒髪山(山内町)・蓬莱山(武雄市)・金立山(佐賀市)に登った」(村岡 2002: 13)とされる。元佐賀女子短期大学の故坂田力三学長の「徐福伝説とその周辺」という論文にも『金立山物語』の記録(坂田 1978: 21)が引用されている。

前述のように、徐福一行が陸路で竜王崎に着いたとする説があるのに対し、水路で有明海から上陸し、竜王崎に着いたという説もある。天保12(1841)年、江戸時代の国学者、伊藤常足(1775 - 1858)が執筆した九州全域の地誌『太宰管内志』下巻の肥前之三、佐嘉郡の「金立神」という箇条には徐福一行の金立山への仙薬探しのルートは以下の通りに記載されている。

権現（徐福）来朝之時、金銀珠玉の飭（飾）乗船、童男童女七百人、歌舞音楽を調へ、（有明海より）肥前ノ国寺井ノ津（諸富町）に御著船有り。浦人障を奉て饗するに、太子（徐福）喜て盃を浮へて興させ給ふ。其跡、一ノ島となる、今ノ浮盃ノ津是なり。寺井ノ津より白布千端を引はへ、其上を踏て御輿を通し、金立山に⁽²⁾移奉る。（伊藤 1989: 62）

19世紀の伊藤の記述は、佐賀市民が今日も語り継いでいる、徐福が金立山に進入するルートとほぼ同じである。徐福は有明海を北上し、海中の孤島である沖ノ島を経由し、竜王崎に辿り着いた。しかし、竜王崎付近は上陸するに適さなかったため、陸地に近づいた徐福一行は大きな盃を浮かべ、流れ着いた所を上陸地とするよう占った。それゆえ、筑後川河口にある徐福上陸地といわれている「浮盃」という地にその名が残されている。地元の伝説によると、「徐福はその地から上陸、生い茂る葦を手でかき払って通ったので、〈片葉の葦〉が生えるようになった」（坂田 1980: 113）とされる。また、筆者の実地調査で、筑後川の川面に落ちた葦の葉が「エツ（齊魚）」という魚になったという伝説が残っていることを確認した。佐賀市諸富（モロドミ）町浮盃から上陸した徐福が、汚れた手を洗うために掘ったと伝えられている「御手洗井戸」がある。また、「手洗い」が訛って「寺井」という地名になったとも伝えられている。すなわち、徐福集団は有明海→沖ノ島→竜王崎→浮盃→寺井津→千布（チフ）→金立山という水路のルートで上陸したのである。このコースは現在の佐賀市に伝わっている徐福渡来の伝説と一致している。

(2) ビャクシンの古木と千布の地名由来

佐賀市の徐福伝説は前述のものだけではない。諸富町新北（ニキタ）神社には徐福が中国から持ってきた種を植えたといわれている、樹齢2200年との言い伝えのあるビャクシンの古木がある。さらに、金立山へ向かう途中で、ぬかるんだ道を歩くために、千反の布を敷いたという伝説から、千布という地名が残っている。さまざまな困難を乗り越えた徐福は、地元の源蔵という人の案内で、金立山に行った。徐福は金立山でフロフキという薬草を見つけ出したが、不老不死の薬草ではなかった。

(3) 神としての徐福

地元の伝説によると、徐福は人々に稲作、機織り、医薬などに関する技術を教え、金立山で暮らし始めた。源蔵の娘のお辰は中国から来た、知恵に富む徐福に心を寄せた。徐福が金立の地を一時離れるとき、「5年後に戻る」との伝言が、間違えて「50年後に戻る」と伝えられてしまった。お辰は悲しみのあまりに、病に伏せ、ついに亡くなった。地元の人々はお辰をしのぶために、お辰観音像を作って祭っている。一方、徐福は金立山にある金立神社の祭神として祭られている。毎年春と秋に祭りがあるだけでなく、50年ごとに1回の金立神社例大祭が行われている。

II 有明海から上陸した徐福一行

有明海の沿岸地域は、九州北西部に位置する。そこにある佐賀県佐賀市と福岡県八女市は徐福伝承地として有名である。佐賀市の徐福伝説では、「徐福の一行は、海路有明海に入り、一度は竹崎に上

陸したが、その後、沖ノ島を通過して三重津（諸富町寺井）に渡り着いた」（佐賀市 1984: 3）と伝えられている。

従来、徐福の渡来ルートについては、日本各地でさまざまな説が述べられている。しかし、「イネの伝来ルート」と共通するところが多いという点は注目すべきことだと思われる。「イネの伝来ルート」については、次の五つの説がある。

- ①中国から朝鮮半島を経由して北部九州へ
- ②中国の山東半島から直接北部九州へ
- ③中国の江南地方から東シナ海の黒潮に乗り直接北部九州へ
- ④台湾、南西諸島経由して北部九州へ
- ⑤有明海ルート

①から④までの説については、多くの研究者が論じているが、ここでは佐賀市の徐福伝説と関わりのある⑤有明海ルートを分析する。「有明海ルート」説を提唱したのは2005年に死去したサガテレビ元副社長の内藤大典である。内藤は「イネ伝来」の「有明海ルート」について、以下のように指摘している。

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、日本の文化は大きく変容を遂げた。いふなれば古代の文化大革命である。それは経済的に言えば採集経済から生産経済への変容でもあった。この文化の大変容の要因は住みついていた在来人ではなく、渡来人によって移入された「稲作農耕文化」の影響が大きいと言われている。ということになると、この時期に渡来したと伝えられる「徐福集団」がなにか文化的役割を果たしたのではないだろうか？。（ママ）単なる推測とだけは言えない「イネの道」がこの有明海には通じていたかも知れない。（徐福キャンペーン事務局 1989: 5）

日本の水田稲作の歴史については、約2600年前の菜畑遺跡の水田跡がこれまでに発見された中で最古の遺跡だと考えられている。この遺跡は徐福集団が渡来した紀元前219年よりほぼ400年古い遺跡である。考古発掘は歴史研究で非常に重要な手段である。だが、内藤の主張している「有明海ルート」は、考古遺跡に基づいて提唱されたものではなく、佐賀市の徐福伝説に基づき提唱された説だと考えられる。稲作の伝来について、中国内陸から伝来したという説は、日中の研究者の間で異論はない。すなわち渡来人が稲作の農耕技術を伝えたと言断できる。ところが、イネのルートはもともと既定のコースがない上、稲作の伝来は一度ならず、数多くの渡来人が長い年月を経て、徐々に伝えてきたと推測される。稲作が伝来された長い年月の間に、数多くの渡来人が徐福集団の一部として伝説に残されたと考えられる。

佐賀市における徐福集団渡来の伝説は、歴史史実であるかどうかに関わらず、親から子へ語り継がれる中で定着した。徐福伝説と関連する記念物や祭祀活動などを通じて、地元の人々の記憶として蓄積されたのである。例えば、佐賀市では旱魃のとき、徐福の御神体を沖ノ島へ運ぶという雨乞い行事が

往古からある。つまり、徐福一行が佐賀に渡来したかどうかという歴史的イベントについては断言できないが、徐福を雨乞いの神として祭る行事がそのときには既にあったことは明らかである。言い換えると、地元の人々は、信仰の対象として徐福を祭りながら、雨を降らせる行事で徐福への特別な感動を呼び戻すのである。雨乞い儀礼の詳細については後述する。

有明海から上陸した徐福一行について、もう一つ述べなければならない地元の習俗がある。有明海周辺では、漁船の右櫓漕ぎ風俗が残っている。内藤は「日本の漁船はほとんど左櫓（左漕ぎ）で、右漕ぎはきわめて稀である。右櫓は中国と日本では長崎の一部で、あと有明海に面した漁港の船に右櫓が多い」（内藤 1989: 9）と述べている。筆者の知る限りでは、徐福渡来伝承地である青森県中泊町小泊の下前地区にも右櫓の習俗がある。漁船右漕ぎの仕来りを徐福一行が伝えたかどうかは分からないが、少なくとも中国と深い因縁があると推測される。

Ⅲ 浮盃・寺井・千布という地名の由来

(1) 浮盃の地名由来

2017年6月、筆者は日本徐福協会の田島孝子会長（70代、女性）と一緒に、佐賀市に伝わる徐福一行の渡来ルートに沿って、佐賀市の徐福伝説の地を巡った。佐賀県徐福観光振興会澤野隆会長（70代、男性）が各地を案内してくれた。澤野氏は徐福一行の上陸地について、以下のように語ってくれた。

徐福は有明海に入り、どこから上陸するほうがいいのか、それで得意な占いの技術を持つてる徐福は、船中から大朱盃を海に浮かべ、朱盃の流れに従って船を進めました。朱盃が流れ着いた所は筑後川下流の搦（カラミ）でな、それでここから上陸したんです。この辺の地名は浮盃⁽³⁾です。浮かぶ大朱盃という由来があるんです。

浮盃という地名について、寛文5（1665）年に著された『肥前古跡縁起』には、「太子（徐福）悦び御盃を浮べ興ぜさせ給ふ其跡一つの島となる今の浮盃の津是也」（肥前史談会 1973: 388）という地名の由来が記されている。また、浮盃津について、口碑では「昔から如何なる大潮や洪水でも、此津ばかりは盃のやうに起き上つて水害を免れると言傳へ、徐福を水害除の神と崇めてゐる」（佐賀県 1926: 77）とされている。これらの記述から、地元では徐福が古くから神として祭られ、人々の信仰を集めていることが垣間見える。

(2) 寺井の地名由来

徐福と関わりがあり、地名として残されているのは浮盃だけでなく、寺井という所もある。筆者は佐賀の実地調査の際、徐福が掘ったといわれている井戸を訪れた。現在、その井戸は、諸富町寺井の園田良秀氏宅に「御手洗井戸」（写真1、2）として祭られている。筆者は2017年と2018年の実地調査で、2回「御手洗井戸」を訪れたが、園田氏が不在のため、直接の聞き取り調査はできなかった。諸富町寺井津で生まれ育った園田氏は、幼いころに父から聞いた徐福渡来の伝説を次のように書いている。

徐福の船団が着いたのは、有明海の竜王崎（有明町）だったが、山が迫り上陸に適さなかったため、徐福は大きな酒盃を海に浮かべ流れ着いたところから上陸することにした。（中略）徐福一行は、永い航海で飲料水が不足していたため井戸を掘った。そして井戸の水で手を洗い、身も清めた。（内藤ほか 1989: 132）



写真 1、2 徐福御手洗井戸（2018年1月31日撮影）

このように、地元の口碑によると、徐福がその水で手を洗ったので、「手洗い」となり、後に寺井の名が付いたとされる。

また、寺井の万福寺所蔵の「寺井由来」⁽⁴⁾によると、和銅3（710）年、京太郎と町太郎なる者が、徐福の掘った井戸のを知り、再びこの井戸を掘った。当時、行基菩薩が肥前に来て、天山から入江を眺めると、この地が光って照り輝いていたので、照江と名付けたが、徐福の井戸をあばいたというので、火災などが続発した。当時、この地の三つの寺の僧侶が相談して、地名を照江から寺井と改称し、人災・火災を避けるため、井戸を石蓋で覆った。このような一連の活動をみると、地元の住民はこの土地への信仰を古くから持っていたと考えられる。徐福が掘ったといわれている井戸の周辺の地霊を慰めるために、御手洗の井戸から寺井という地名に変わったと推測される。

その後、井戸の所在は不明であったが、大正15（1926）年10月21日、史跡調査のため、この地を発掘した。すると、地下3mの所に井の字形井戸角丸太の上に5個の石で覆われた神秘の古井戸が発見された。これが徐福の掘った井戸であろうということになった。そのため、「手洗い」が訛って「寺井」という地名になったと伝えられている。

このように、「寺井由来」には寺井という地名の由来が書かれている。しかも、この書には和銅3（710）年の徐福にまつわることが記録され、万福寺が所蔵しているものである。だが、『佐賀県近世史料』には万福寺の建立年代について、「天文元年建立」〔佐賀県立図書館 2014：135〕という記録がある。つまり、天文元（1532）年に建立された万福寺は、いつの時期かに、和銅3（710）年の徐福伝説から由来した井戸に関する「寺井由来」という資料を所蔵したことになる。万福寺の創建と寺井伝説とは800年以上の隔りがある。この800年の間に、どのようなことがあったのかは、長い年月が経っているため、分からない。和銅3（710）年の徐福伝説は、後世に人為的に作られ、地元の口碑として言い伝えられてきた可能性があると考えられる。史料が欠如しているため、明確な結論を出せない

が、万福寺が所蔵する「寺井由来」は、当該地域の由緒が古い時代から徐福伝説と結びついてきたことを証明するものである。

(3) 千布の地名由来

千布という地名の由来について、佐賀県徐福会の故村岡央麻会長は、その著書で「佐賀市から金立へ向かう途中に、千布という地名があります。これは徐福一行が上陸地から不老不死の薬草を求める金立山を目指したとき、道がぬかるんで歩きづらかったので、布を敷き敷きその上を進んだ。その千反にもぼる布に因んで千布という地名がついたといわれています。徐福の中国呼び〈シーフー〉と似ているところも気になります」(村岡 2002: 11) と述べている。佐賀市には、古くから千布という地名に関する口碑がある。千布村の名は『実相院文書』の中の応永 33 (1426) 年「常見家長寄進状」にあるのが初見である〔佐賀県立図書館 1974 : 212〕。千布の地名由来はおそらく後世の人が徐福伝説と結び付けて考え出したものであろう。

谷川健一は地名とその土地に住んでいる人々との繋がりについて、次のように述べている。

地名は土地につけられた名前であるが、古代人は土地にも魂があると考えていた。それは国魂と呼ばれていた。(中略) このように地霊もしくは土地の精霊に対する古代人の信仰があり、地名には地霊もしくは精霊が宿るものと考えられていた。私どもが土地に触れて共同感情が喚起するのを覚えるのは、地名を長く使用してきたからであるが、更にその根底に土地への信仰があるからである。歴史的な背景を持つ地名が、今日一部の人が考えるような場所の認識のための符合にとどまらないのは当然である。(谷川 2011: 209)

つまり、地元の住民たちは、この土地の精霊を慰めるために、あるいは共同の感情を喚起するために、地名という形で古い時代から伝えてきた信仰を守っているのである。

柳田国男は地名と伝説との関連について、伝説の研究者に以下の助言をしている。

一方土地の歴史を学ぼうとする者にも、伝説から来た地名の趣旨を知ることは大なる参考である。というわけは一つ一つの伝説には、おおよそそれが盛んに流布した時代があるから、これに基いてその土地が開け、人がそんな名を付与した時代を、ほぼ推定することも不可能でないからである。(柳田 1990: 207)

すなわち、伝説から由来した地名にとっては、伝説の流布した時代から、この土地を名付けた時代が推測できる。また、土地を名付けることによって、当時の信仰などを今日に伝えてきたのであろう。つまり、伝説は当時の信仰などを伝える手段として認められる。地名は当時の信仰などの痕跡を残し、伝説の真実性をも証明する。この面から考えると、伝説と地名は互いに補い合い、双方の妥当性を検証したと考えられる。

往古から語り継がれてきた徐福伝説は、佐賀市で浮盃・寺井・千布などの地名という形で定着し伝承されてきた。歴史もしくは伝説の背景を持っているこの地域では、徐福は地霊のような存在だと見

込まれている。前述の分析から、浮盃・寺井・千布などにある徐福伝説には、古い時代から人々の信仰と繋がりがあったことがうかがわれる。もちろん、地名として定着した信仰に限らず、神として祭られている信仰もある。徐福は金立神社の祭神である。また、地元の人に農耕・養蚕・織物・医薬の神として祭られ、「金立大権現」とも呼ばれている。

IV 片葉の葦と筑後川の珍魚「齊魚」

徐福渡来伝承地としての佐賀市には、片葉の葦(写真3)⁽⁵⁾の伝説が残っている。東寺井に住んでいる原田角郎氏の話が『佐賀に息づく徐福』に次のように記載されている。



写真3 筑後川周辺の片葉の葦(東島邦博氏提供)

徐福の船が擗の所さい、はいってきた時、あの、押し分けてきたてですね。そいで、その葉が落ちたわけですね。落ちたとがえつ(齊魚)になって残ったとが、片葉の葦ちゅうて、あすこは、片一方だけ、葉っぱの付いた葦のずらっと分布してですね。(村岡 2002: 19)

徐福上陸地と伝えられている浮盃周辺には、片葉しか生えない葦が多くある。また、筆者が中国江蘇省連雲港市贛榆県金山鎮徐福村で調査したときにも、徐福廟の周辺で同じ種類の葦を発見した。これが偶然かどうかは分からないが、少なくとも徐福と何か関連があるように思われる。

(1) 珍魚であるエツ

佐賀に流布している「片葉の葦」の伝説によると、有明海から漂着してきた徐福一行は、浮盃の擗に上陸し、沿岸の生い茂る葦を手で掻き分けて通ったことから、葉身左右対称の



写真4 筑後川のエツ(東島邦博氏提供)

葉が「片葉の葦」になったといわれている。また、落ちた片葉は有明海沿岸特有の「エツ」(写真4)という魚になったとも伝えられている。エツは、「ニシン目・カタクチイワシ科・エツ属。同族には本種のみ。日本南部から朝鮮半島、東シナ海、東南アジア、インドに分布。日本では有明海に多く生息する」(日本水産広報室 1986: 73) 魚である。当該書のエツに関する風俗誌では「ナイフのような体形から、中国では〈刀魚〉の俗称がある」と述べられている。また、『魚の事典』によると、エツ

は「日本では筑後川・矢部川を中心に有明海奥部に多く分布するが、朝鮮や中国にも同属が分布する」（能勢 1989: 58）魚である。つまり、エツは日本ではあまり見られない魚であり、筑後川や矢部川の河口部沿岸を中心に、有明海奥部に多く棲息しているのである。

そればかりでなく、エツという魚は漢字で「齊魚」や「鱗」と書かれる。エツは有明海特産の珍魚として、漁民の間で齊の国から来た徐福と関係があることから、「齊に魚」もしくは「魚偏に齊（齋）」と書くと伝えられている。エツの棲息習慣とエツ漁について、小馬徹は、以下のように述べている。

エツは、四月下旬頃から河口近くに集まり始め、六月から八月にかけて約二十キロメートルさか上って産卵する。産卵を終えると再び有明海に下る…（中略）長さ一五〇メートル、幅二メートルばかりの刺網で捕る。漁は、五月十五日に解禁され、七月半ばまで続けられる。筑後川がほとんど唯一の漁場だ。（田主丸町誌編集委員会 1996: 17）

エツは筑後川の初夏を代表する風物詩である。エツ料理は筑後川の名物であり、天ぷら、塩焼き、煮付け、刺身などがおいしいと地元の住民から聞いた。近年、佐賀市商工会と佐賀市諸富支所の支持を得て、佐賀市もろどもin食の会が主催する「佐賀市もろども徐福えつ銀色祭り」というエツの賞味を中心とする祭りが開催されている。エツという魚は初夏になると、有明海から筑後川に遡上する。このような棲息習慣があることから、漁獲時期の6月は、エツを味わう最高の月であるといわれる。食膳に供するエツ料理は、地元の特産物販売などの活動と組み合わせられ、佐賀市商工会などに活用されている。それ故、諸富町に特色ある「佐賀市もろども徐福えつ銀色祭り」が成立した。この祭りは諸富町の珍魚であるエツを宣伝する役割を果たしている。同時に、この祭りによって地元住民の生活に潤いと豊かさが加えられる。これは徐福と関わりのあるエツ伝説のロマンが伝承されている証拠だと考えられる。

(2) 片葉の葦

柳田国男は「諸国七不思議の一つとして折々数えられる片葉の葦は、片目の鰻または片身の鮒など」（柳田 1990: 563）になったという伝説があると指摘している。佐賀市には片葉の葦とエツとを組み合わせた伝説がある。その伝説では、片目の魚ではなく、両目付きの齊魚になっている。柳田国男監修『日本伝説名彙』の「木の部」には全国の「片葉蘆」に関する伝説がまとめられている。そのうち、佐賀市の片葉葦については、金立大権現（徐福）上陸のとき、「権現様が蘆を押わけ給ひしにより、片葉の蘆となった。雨乞いに権現様お降りのときは、この片葉蘆を取って帰り、祓のためにする」〔日本放送協会 1950: 89〕との伝説と由来が記載されている。しかしながら、当該書によると、千葉県東葛飾郡葛飾村の片葉蘆は「（弘法）大師が杖を持って片葉を拂はれたためだといふ」〔日本放送協会 1950: 88〕。前述の伝説から、片葉葦の伝説は主人公が徐福だけにとどまらず、弘法大師に変わった伝説もあると考えられる。

さらに、日本全国の片葉葦の伝説だけでなく、同じ筑後川のエツの伝説の中にも、主人公が徐福ではなく、弘法大師である伝説もある。「筑後川の産地には、弘法大師が諸国行脚の途中、川を渡れずに困っていたとき、親切な漁師に助けられ、そのお礼に、岸辺のアシをむしって川に投げたらエツに

変身したという伝説が残っている」(小学館 1985a: 527)。この伝説は地元にも伝わる徐福伝説と同じ類型である。つまり、エツという魚は葦の葉から変身したものである。この二つの伝説はどちらが先か分からないが、少なくとも筑後川には2種類の同じタイプの伝説が残っていることが分かる。これはおそらく徐福や弘法大師とは無関係な伝説に徐福、あるいは弘法大師が入り込んだ可能性があると考えられる。弘法大師の伝説は日本全国各地にあるが、徐福伝説として有名な佐賀市に同じ話型の伝説が同時に存在することは、研究する価値があると考えられる。

また、小学館出版の『日本大百科全書 5』には、片葉の葦の伝説について、以下のように記述されている。

地勢や水流など自然環境のいたずらで、片方の葉しか茂らぬ葦。その奇形の由来を説明するため、さまざまの伝説が各地で生まれた。たとえば、弘法大師などの高僧もしくは源義経、熊谷直実など語物に伝えられる武将が、杖または軍扇でなぎ払ったため片葉の葦となった、というたぐいである。英雄の乗った馬がそれを食らったため、とする伝承もときたまみられる。(小学館 1985b: 347)

日本全国の片葉の葦の伝説からみると、片方の葉しか生えない葦は、本来の姿ではない特殊なものである。つまり、日常的な姿とは異なるものであるから、神聖なものともみなされる。それゆえ、片葉の葦を語る時、その神秘性を表すために、よく歴史上の偉い僧侶・英雄などとの繋がりが語り物として説かれていると考えられる。

片葉の葦と珍魚のエツとその組み合わせは、筑後川特有の風物詩である。また、徐福渡来の伝説は古くからあり、いつの時期かに、徐福伝説のロマンを通して、地元での片葉の葦とエツを組み合わせるようになったと推測される。もちろん、これと似ている伝説は他の地域にもある。また、主人公が徐福ではなく、弘法大師などの偉人である伝説は、各地に散在している。佐賀市では、片葉の葦とエツを組み合わせる伝説が従来からあり、主人公が徐福に入れ替わった可能性が高いと推測される。なぜならば、伝説がある地域に根付いて長い年月、語り継がれるということは、当該地域の信仰と密接な関係があるからである。つまり、その地域に影響を持つ人物が、その伝説の主人公に取って代わるといえるだろう。佐賀市における片葉の葦やエツに関わる伝説などは、初めその主人公が徐福ではなかったものが、徐福に取って代わった可能性が高いと推測される。

これはおそらく徐福がこの地域の人々にとって、大きな影響を持つ特別な存在だったからであろう。その影響力は、徐福に対するあつい信仰によるものである。信仰の源は、金立神社に徐福が大権現として祭られていることである。佐賀市において、片葉の葦やエツなどの伝説の主人公が徐福であるのは、やはり信仰的な背景があるためである。古い時代から地名由来などと結びつき、今日でも語り継がれているのであろう。佐賀市の地元の人たちは、徐福の渡来によって、掻き分けられた葦の片葉が筑後川特有のエツになったという話を子供の時分から聞くことによって、強く信じられる口碑として定着させ、伝えているのである。佐賀市の人たちは、地元にも特有な片葉の葦や珍魚のエツの物語、また地名の由来などを心から信じ、生き生きと子孫に語り伝えている。そのようなあり方が佐賀市における徐福伝説の伝承形式といえるだろう。

V 樹齢 2200 年以上のビヤクシン伝説

佐賀県佐賀市諸富町の新北神社には、樹齢 2200 年といわれる「ビヤクシン」(写真 5) の古木がある。このビヤクシンは日本では珍しい古木であり、現地には「徐福が中国から持ってきた」という伝承が残っている。幹回り 4.1m、枝張り 6m、樹高 20m の巨木である。昭和 54 (1979) 年、町天然記念物に指定され、「さが名木 100 選」にも指定されている。大きなこぶを抱え、上部にいくほど曲がりくねり青々と葉を茂らせた姿はまるで昇龍。「飛龍木」の別名もある。⁽⁶⁾



写真 5 樹齢 2200 年のビヤクシン
(2017 年 6 月 23 日撮影)

新北神社の祭神は日本神話に登場する素戔鳴尊である。神社の歴史について、『佐賀県神社誌要』には「用明天皇のご創建にして、嵯峨天皇御再建あり、爾来国主に於て宮繕に來れり、明治四年十二月郷社に列せらる、祭神倉稻魂命外十柱の神は無格社合祀により追加す」(佐賀県神職会 1926: 43) との記述がある。素戔鳴尊は日本記紀神話の神であり、日本の多くの神社に祭られている。大正 15 (1926) 年に発行された『佐賀県神社誌要』には、徐福のことは一切書かれていない。だが、「徐福が持ってきた」といわれているビヤクシンの古木は、当該神社のシンボルとしてよく知られている。新北神社の参道を抜け、本殿の右側に巨木はそばだっている。このビヤクシンは徐福伝説のいわれを持ち、新北神社の御神木として祭られている。

新北神社のパンフレットによると、新北神社は、用明天皇の御創建で嵯峨天皇の御再建であるという。また、「国内唯一、秦の始皇帝の命により仙薬を求め渡来した徐福手植えの伝説が残る御霊木が〈御神木〉である」とも述べている。前述のように、佐賀県神職会が大正 15 (1926) 年に編纂した『佐賀県神社誌要』には、新北神社の祭神は素戔鳴尊であり、明治 4 (1871) 年、倉稻魂命と他の十柱の神を合祀するとの記述もある。『佐賀県神社誌要』とパンフレットの内容を比べると、90 年前には徐福の記録が一言もなかったのに対して、現在のパンフレットでは、徐福の手植えだと伝えられているビヤクシンを御神木として祭るとされていることが分かる。さらに、大串氏は新北神社のビヤクシンと徐福について、次のように述べている。

新北神社は「スサノオノミコト」と「徐福大権現」を合祀しており、徐福が中国の五穀とともに持ってきたビヤクシンの種を植えたと伝えられる。「にきた」も、新しく来た渡来人を祀るという意味の響きがある。⁽⁷⁾

新北神社に徐福大権現が祭られていることに関して、神社の由緒には一言も書かれていない。しか

し、御神木として祭られているビヤクシンの存在は、徐福が手植えしたという伝説が古くからあることを裏付けている。

筆者は2018年2月、佐賀市で2回目の補充調査を行った。その際、佐賀県徐福会の大串達郎理事長（70代、男性）と佐賀県徐福会の水間祥郎理事（70代、男性）と徐福長寿館の廣橋時則館長（60代、男性）の3人のご案内を頂き、ビヤクシンを御神木として祭っている新北神社を訪れた。ビヤクシンの古木を守っている新北神社の川浪勝英宮司（60代、男性）は「諸富町内には多くの徐福伝説が残っているが、ビヤクシンもその一つ。この古木は徐福さんが中国から持ってきた種を植えられたのだろう。幼いころからそういう話を聞いた⁽⁸⁾」と語ってくれた。地元語り継がれている古木のビヤクシンに関する伝説は、川浪宮司の話と似ている。境内のビヤクシンがいつ、誰によって植えられたのかについて、川浪宮司と佐賀県徐福研究会の方々に尋ねたが、具体的な資料はない、との返答であった。しかし、徐福が中国から持ってきた種を植えたという伝説は、一般的に地元の人々に受け入れられ、深く信じられている。

「飛龍木」と呼ばれているビヤクシンは、正に飛龍の姿をしている、つまり傾斜した古木である。写真5に示したように、約50度の傾斜角度がある古木は、2200年間の風雨により、土壌が弛み倒れやすくなっている。それゆえ、このような「大きく傾斜した樹木は、転倒防止対策として支柱6本が設置（平成元年）されている」（松江 2010: 105）。土壌改良や剪定などの治療によって、ビヤクシンは枝葉に勢いを取り戻し、元気に生き返った。また、当該資料集には新北神社境内のビヤクシンの「推定樹齢は1600年」であると指摘されている。この1600年というのは科学的な推定樹齢である。だが、地元の伝説によると、このビヤクシンは徐福の渡来と同じ時代のものであり、2200年の樹齢があるといわれている。言うまでもなく、科学的な推定は間違いではない。しかし、伝説でありながら、ロマンがあるからこそ、徐福とビヤクシンの伝説が佐賀市諸富町で伝承されてきたのであろう。また、前述の川浪宮司の話と併せて考えると、新北神社の境内にそばだっているビヤクシンは、諸富町の歴史と伝説を物語る古木として、地元の人々に守られているのであろうと思われる。

また、地元の佐賀新聞には、「十数年ぶりに樹木医の治療を受け、一皮むけた格好の古木に〈過度な栄養は厳禁で除草剤もダメ。自然の流れに任せ、大切に見守るだけです〉。川浪さんは温かいまなざしを向け⁽⁹⁾る、とする記事がある。新北神社の川浪宮司と地元の人々の見守りのお陰で、徐福伝説とビヤクシンなどの事物が地元で融合し、生き生きと伝承されているのだと、筆者は調査の際に実感した。

VI 金立山で発見した仙薬

金立山地域の口碑によると、次のような話が伝わっている。さまざまな困難を乗り越えた徐福一行は、地元の案内人の源蔵という人物の協力を得て、毎日懸命に金立山で不老不死の仙薬を探し求めた。そのとき、天から5色の雲に乗った弁財天女が現れ、仙薬「フロフキ」を授かったという。

伝説に登場した徐福と弁財天女が出会った場所について、佐賀県徐福研究会の会員である大野恭男氏はこのように記している。「金立山山頂から四〜五十メートル下った辺り。東へ谷を降りると巨大な岩の裂け目からしたたる水場があります。この一帯が〈蓬莱島〉と呼ばれ⁽¹⁰⁾る所である。つまり、

徐福が弁財天女から仙薬を授かった所は「蓬莱島」と名付けられた。

また、弁財天女から授かった仙薬といわれているフロフキは、実は寒葵（写真6）という植物である。この薬草はウマノスズクサ科に属する常緑の多年草である。寒葵という植物の方言の呼び方は、佐賀県の各地で異なっている。佐賀市では「くるふき」、三瀬・七山・山内では「ふろふき」、佐賀市・多久市では「ふろふし」、巖木では「ふろふちん」と呼ばれ、それぞれ異なる（佐賀植物友



写真6 寒葵=フロフキ（2017年6月23日撮影）

の会 2007: 55)。前述の寒葵のいくつかの方言の呼び方は、日本語の不老不死（フローフシ）の発音と似ているため、「不老不死」に由来する可能性があるとして推測される。そのうえ、金立地区で語り継がれている伝説によると、徐福が仙人から授かったといわれている仙薬は「フロフキ」である。金立山周辺の各地域には寒葵に関する呼び方が複数あるが、本論文では地元の口碑に定着している「フロフキ」という呼び方に統一する。

さらに、日本全国に伝わる徐福伝説にはさまざまなバリエーションがある。その中で徐福が秦の始皇帝の命令を受け、不老長寿の薬草を探すとというパターンは、欠くことができないパターンである。しかしながら、地元の口碑（詳細は後述）によると、徐福集団が金立山で見出した「フロフキ」という薬草は、不老不死の薬草ではなかった。この薬草は万病の薬ではないが、現在地元では喘息と利尿などの民間薬として用いられている。

筆者が金立地区で「フロフキ」に関する実地調査をした際には、水間祥郎氏の案内を頂いた。水間氏は徐福が弁財天女から「フロフキ」を授かったことについて、次のように説明してくれた。

金立山の山頂には、石造りの金立神社があります。その昔は、湧出御宝石のそばに雲上寺があったそうです。また、金立神社から下ったところにある御湧水石、昔この辺りは蓬莱島といわれていました。そこにはさあ、徐福がフロフキを授かったという木造の弁財天があったそうです。その弁財天を雲上寺の住職が石造りにしたそうです。もともと御湧水石の辺りにあったんですが、心無い人が山頂から持ち出し、山麓の村を転々とししました。今はねー、金立神社下宮の横の弁財天の建物の⁽¹¹⁾中に置かれています。

弁財天女から授かった「フロフキ」に関する伝説が書かれた案内板は、現在の金立神社下宮に位置する弁財天という建物の前にある。そこには、当該伝説と石像の弁財天の由来が書かれている。内容は以下の通りである。

甲羅弁財天について

上宮のすぐ東の崖下の雲上寺時代庭園を成していた所で石の反り橋等架かり、その庭園内の中の島（蓬莱島）の上に弁財天を祀ってあった石像です。

弁財天については次のような伝説が残っています。

徐福さんが当山で幾日も幾日も不老不死の妙薬を探しあぐね、この東谷で当惑の体でいた時、眼前の一角に五色の雲が現れて天女が静かに下りて来て徐福さんに不老不死の妙薬(フロフキ)を授けられた処がこの蓬莱島であったとのこと。

当山では開山以来此処に弁財天が祀られていましたが、元禄年間(一六八八)に至り像も堂宇も腐朽したため、時の雲上寺の現住本瑞が石工に命じて弁財天の石像を建立したのです。その石像の裏面には明らかに年代、建立者名が記してあります。

記

甲羅弁財天

安政五戌午歳(一八五九)陽春吉辰 蓬莱島弁財天 当山現住本瑞建焉
靈験あらたかな弁財天で崇敬者多数で今日に至っています。

敬白

すなわち、金立山雲上寺の開山以来、蓬莱島の上には既に弁財天が祭られていたと推測できる。元禄ごろ、木像も堂宇も腐ったので、時の本瑞住職が新たな弁財天の石像(写真7)を建立して祭ったのである。しかしながら、「明治の初め神仏分離となり雲上寺が廃止されたあとも大正の中ごろまで残っていたが、その後、大正十二、十三年ごろこの石像は担ぎ出され、人の手を転々と渡り現在は、金立神社下宮の境内に祭られている。この観音はいわゆる甲羅弁財天と呼ばれ亀の甲羅の上に弁財天を安置してある」(佐賀市 1984: 9-10)といわれている。

金立山雲上寺の盛衰については、真崎実央の研究では、以下のようにまとめられている。

「雲上寺は金立山の座主坊として中世に栄え、妙楽寺、后寺という二つの大きな末寺をもった大寺院であった。雲上寺の本坊は、幕末まで存在の記録があるが維新の廃仏毀釈により廃寺となってしまった」(真崎 1987: 44)。また、正保5(1648)年に描かれたといわれている「金立神社縁起図」(写真11)からは、金立神社上宮の右側に「蓬莱島本地弁財天」と「妙楽寺」が配置されていたことが分かる。金立山雲上寺の由緒に関する記録は、明治時代の廃仏毀釈により、紛失してしまった。だが、前述の真崎の研究や現存する「金立神社縁起図」などの資料から、雲上寺の栄枯盛衰の歴史を辿ることができる。さらに、当時徐福と関連がある「蓬莱島弁財天」を祭る状況もうかがえるであろう。

金立山雲上寺の開山がいつなのかは分からない。しかし、少なくとも正保5(1648)年以前に徐福が弁財天女から仙薬を授けられたという伝説が既にあったと推測できる。徐福は地元で金立神社大権現として祭られている。また、金立神社下宮には七福神の唯一の女神である弁財天の祠が安置されている。周辺の住民の話によると、金



写真7 甲羅弁財天の石像(2018年2月1日撮影)

立神社下宮で祭神の徐福を祭るときには、仙薬を授けたといわれている弁財天も祭るという。地元の人々にとっては、徐福は先進文明を持ってきた外来の神であるだけでなく、日本の神である弁財天とも関連がある人物でもある。同時にさまざまなロマンあふれる伝説を残し、地元の生活に融合した人物でもあった。このようないわれ因縁があるから、地元では、古くから徐福を記念するさまざまな活動が中断せずに行われているのであろう。

VII 徐福とお辰との悲恋伝説

佐賀市に語り継がれている徐福伝説は、前述の仙薬探しの物語があるだけでなく、地元の住民とロマンティックな関係を持つ伝説も残っている。本論文の第Ⅲ章では徐福伝説にちなんで千布という地名の由来を紹介した。金立町千布地区の口碑によると、徐福一行は不老不死の仙薬を探するため、千布に住んでいる百姓 源蔵に案内を依頼したといわれている。筆者の千布における実地調査で、千布の多くの人々が、徐福と源蔵の娘 お辰との悲恋伝説を知っており、地元特有の物語としてよく語られているということが分かった。

千布の伝説によると、「源蔵が金立山への案内役を頼まれたとき、徐福一行を屋敷に案内し接待したという。源蔵の娘お辰を陪席させたことが縁で徐福との恋が実った」（佐賀市 1984: 5）といわれている。源蔵の屋敷跡は金立町東千布（金立郵便局の辺り）にあると伝えられている。そのため、この近くに案内役を務めた源蔵を記念する松が植えられ、「源蔵松」（写真8）と命名された。この松は「たびたびの災害で植え替えられ今は小さい松であるが、ここは徐福一行が案内役を探し求めたとき野良仕事⁽¹²⁾をしていた百姓玄蔵(ママ)を発見したところといわれている」〔佐賀市立金立公民館 出版年不明: 2〕。

源蔵の案内で、徐福は金立山で弁財天女から「フロフキ」という仙薬を授かった。しかし、徐福が金立山で見つけた薬草は、不老不死の仙薬ではなかった。また、土地の口碑では、徐福とお辰との悲恋伝説について、次のように語られている。源蔵の娘 お辰は中国からきた知恵に富む徐福に心を寄せた。徐福一行が金立山で不老長寿の薬草を発見できず、金立の地を一時離れるとき、使者が「5年後に戻る」という伝言が誤って「50年後に戻る」と伝わった。お辰は悲しみのあまりに、病に伏せ、ついに亡くなった。いまわの際、お辰は「自分は思いがかなわず死出の旅路をたどるが、私の死後、私を祭ってくれる者があれば、参拝する人の願いをかなえてやる念願を持っている」（佐賀市 1984: 5）という言葉を残して世を去った。

筆者は現地調査の際、東千布に位置する小さな観音堂を訪れた。この観音堂に祭られている観音の本体は、徐福の恋仲のお辰である。今のお辰観音像（写真9）について、周辺に住んでいる住民は「この一生徐福とは会えない悲しみを持っているお辰の死後、近郷の人々の間で相談し、お辰を



写真8 源蔵松（2018年2月2日撮影）

かたどる観音像を建立して祭ったのが、今の観音像であると伝えられている」という。また、観音堂と観音像の修理について、現存する資料によると、「昭和五十八年二月にお辰観音堂が修理された」（佐賀市教育委員会 1983: 18）としている。さらに、平成3（1991）年には観音像の塗装修復がなされている。観音堂に立つ観音像は左手に酌の徳利（これは恋の糸口を作ったといわれ、当初源蔵の宅での接待に使われた）、右手に石楠花（これは金立山に咲き、二人の恋を象徴する花である）を持つ姿をしている。また、昭和4（1929）年に公刊された『金立山めぐり』の記録によると、「立ち姿であるからこの邊の人たちはお立ち観音とも言ふ。恋やお産の御願に妙にきくとて人目を忍んだ参詣者が多い」（北島 1929: 29）といわれている。当時数多くの参詣者で賑わった情景が浮かび、地元の人々のお辰観音への敬意が推察できる。人目を忍んで参詣に来る人も多く、お辰観音が良縁やお産に関する祈願を頻繁に成就してくれることを証明している。



写真9 お辰観音像
（『太古のロマン 徐福伝説』より）

金立町千布にある観音堂の前には、徐福とお辰との悲恋伝説を説明する案内板が設置されている。内容は以下の通りである。

お辰観音

秦の徐福が不老不死の薬を求めて金立山に渡来し、この地の豪農源蔵宅に立ち寄った際、接待にでた源蔵の娘お辰と相見えそれが縁で二人の心が結ばれ恋仲となったものの、異国人でありまた身分の相異などからこの恋は結ばれぬままお辰はこの世を去った。

村人は、このお辰をあわれみ、お辰を形どる観音像を作り祀ったのがこの観音堂であり、今では縁むすびの仏として崇められている。

金立神社お下りの時はこの像を奉じて送迎するのがならわしとなっている。現在の堂は、延享二年（1745）建立され、その後二回改築された。

案内板の内容は、地元には伝わっている伝説とほぼ同じである。つまり、地元の人々はお辰と徐福との悲恋伝説をしのぶために、お辰観音像を作って祭っている。お辰観音が縁結びの神として祭られ、地元では結婚祈願が高い頻度で成就すると伝えられている。また、50年ごとに行われる「金立大権現のお下り」（徐福さんのお下り）のときには、必ずお辰観音を観音堂の外に運び、徐福さんと再会させる行事を行う。この行事がいつ定着したのかは不明だが、自然に定着した習わしであろうと思われる。口碑として地元で語り継がれている伝説には、誤って「50年後に戻る」との伝言がある。その伝言に基づいたものであろうか、実際に50年に1度の徐福との再会の祭りが往古から中断せずに行われている。50年に1回の祭祀活動の開催から、地元の人々の徐福とお辰に対する敬愛もうかがえるであろう。

また、伝説に登場した女主人公のお辰の名前について、三谷菜沙夫は「弥生時代の娘の名が、お辰

というものなんとも奇妙だが、こういう話が伝えられているうえに、観音堂まで実在するのは、徐福の存在がしっかり地元根づいていることを物語っている」(三谷 1992: 217) と指摘している。筆者が朝日本歴史人物事典・新潮日本人名辞典・大日本百科事典・講談社日本人名大辞典・日本人名大事典などの辞典を調べた結果、父の源蔵という名前はおよそ江戸時代からあったことが推測できた。さらに、日本女性人名辞典や戦国人名辞典などの辞典をみると、お辰という名前もおそらく父親の源蔵と同じ時代の人名であると思われる。

地元で伝わる、源蔵とお辰と徐福との伝説の起源がいつなのかは、はっきりとは分からない。しかし、現存する資料と徐福にまつわる事物(観音堂などの建立)からみると、少なくとも江戸時代中期から既にあったと推測される。今まで収集した資料と筆者の地元での実地調査とを併せて分析すると、次のようなことが推測される。金立山周辺の徐福とお辰との悲恋伝説は、おそらく江戸時代中期から一般庶民に熟知されていた。お辰に観音堂を建立することは、徐福とお辰との恋愛伝説がこの地に融合した証だと考えられる。

VIII 金立神社大権現としての徐福

(1) 金立神社の歴史

佐賀平野の北部に位置する背振山系の南には標高 501.8m の金立山がある。金立山の山頂から山麓に至るまで、金立神社の奥の院、上宮、中宮、下宮が並んで鎮座している。金立神社では 4 体の神を祭っている。すなわち、日本記紀神話の「穀物の神」である保食神(ウケモチノミコト)、「水の神」である罔象売女命(ミズハメノミコト)、天照大神の御子である天忍穗耳命(アメノオシホミミノミコト)と秦の時代に渡来したといわれる「農耕養蚕医薬の神」としての徐福である。金立神社の祭神は 4 体であるが、「金立大権現」とは、資料記録や地元口碑からすると、いずれも徐福のことを指すと古い時代から考えられている。徐福以外の 3 体の神は、記紀神話に記されている創世の神である。神代の神を祭る神社は日本全国各地にあるが、徐福を大権現として祭る神社の数は少ない。金立神社はその数少ない神社の一つである。また、明治以前の記録によると、金立神社は元々保食神・罔象売女命・徐福という 3 体の神を祭っていたが、「明治四年十二月郷社に列せらる。祭神天忍穗耳命は無格社合祀により追加」(佐賀県神職会 1926: 47) された。それゆえ、現在の金立神社の祭神は 4 体となった。

金立神社は 4 体の神を祭っているが、前述のように、「金立大権現」として祭られているのは徐福であり、徐福だけが金立神社の祭神である。これについては、数多くの史料に記録されている。例えば、『佐賀市の文化財』は、金立大権現について、以下のように述べている。

旧藩時代、神社から提出している由緒書によると、金立大権現、即わち徐福だけが祭神として扱ってあるようであり、また、天和八年十二月に書いて、明治二十三年七月鍋島直大の意によって編集した「金立山注書」に載せてあるのも同様である。また、民間の口碑も“金立山は秦の徐福”と伝わって、その通りかたく信じられている。この神社の起原は孝霊天皇の代と伝わっており、およそ徐福の時代と合致する。これによると約二千年の歴史をもつことになる。(佐賀市教育委員会 1962: 231)

金立神社の祭神が徐福であるということについては、江戸時代から既に詳細な記録があった。また、民間の口碑も現在と同じく、従来から「金立神社大権現は徐福さんである」と地元の人々が語り継いでいる。さらに、徐福一行の渡来について、大串達郎氏は次のように述べている。

上陸地は、筑後川の河口にあたり、地名は、大字寺井津東湯（ママ）、旧名を浮盃新津といいます。ここにあった金立権現神社の跡地には、「徐福上陸地」の石造の標識が立ち、金立神社跡の記念碑があり、現在も、五月に地元民により徐福をしのんで祭（権現祭）が行われています。（大串 2005: 73）

金立神社には前述の奥の院・上宮・中宮・下宮の他、寺井下宮という末社がある。この寺井下宮は徐福上陸地の諸富町大字寺井津にある。寺井下宮の境内には「金立神社御舊蹟」と「徐福上陸記念碑」という二つの石碑が立っている。また、1989年には陶器製の約60cmの徐福像が佐賀県多久市の人形師の倉富博美氏（60代、男性）によって制作され、境内のお堂に奉納されている。

現在の寺井下宮は、金立神社末社とも呼ばれ、金立神社下宮の旧跡となった。平成28（2016）年9月、寺井下宮に高さ約10mのコンクリートの鳥居が建立された。元の金立神社寺井下宮の建物は、素朴で古風な風格を持つため、屋根と柱からなる骨組みの部分が現在諸富町東搦公民館（写真10）の一部として移築され、使用されている。2018年2月の補充調査の際、筆者は大串達郎氏のご案内を頂き、諸富町東搦公民館を訪れた。大串氏は、以下のように語ってくれた。



写真10 諸富町東搦公民館(2018年2月5日撮影)

諸富町東搦公民館は平成6年に新築されたんです。大正の初めに、今の上陸地、先日行った金立神社末社から、ここに移転されました。江戸時代中期、300年前かなあ、金立神社末社が徐福上陸地の所に建てられました。明治に入ってさあ、神社が廃止されてしまいました。大正の初めに、末社の建物の一部は、今の東搦公民館の所に移転してきたんです。平成5年に、建築しはじめ、6年3月に新築されました。だいたい1年かかりましたよ。⁽¹³⁾

新築された以前の東搦公民館の様子について、森浩一の『図説日本の古代 第1巻 海を渡った人々』に、昭和末期の公民館の写真が掲載されている（森 1989: 112）。

金立神社の創建時期は古く不明だが、『日本三代実録』には、清和天皇貞観二（860）年二月八日条に、「正六位上金立神従五位下」（経済雑誌社 1897: 54）に昇叙された記事があり、さらに陽成天皇元慶八（884）年十二月十六日条では「従五位下金立神従五位上」（経済雑誌社 1897: 649）となった記録がある。これらの記録から、当時の朝廷が同社を重視したことがうかがわれる。金立神社の建立時期は明らかではないが、少なくとも貞観2（860）年には創建されていたと推測できる。だが、地元の口碑によると、「この神社の起源は孝霊天皇の代と伝えられ、およそ徐福の時代と合致する。これ

によると、約二千年の歴史を持つことになる」(坂田 1980: 107) と語り継がれている。

さらに、『歴代鎮西要略』には徐福が金立山に渡来したことについて、以下のような記述がある。「第七代曰、孝霊天皇御治世七十二年壬午、異朝秦始皇使方士徐福入東海求不老不死薬、徐士率童男童女数千入海、卒来止日本云云。筑紫肥前州金立雲上山、徐福止跡之霊地也」(近藤 1976: 12)。すなわち、孝霊天皇 72 (紀元前 219) 年に徐福は秦の始皇帝の命を受け、不老不死の仙薬を探すために日本に渡来したといわれている。さらに、肥前の金立山(雲上寺)は徐福の足跡がとどまる霊地であると述べている。徐福一行が金立山に渡来したことについては、江戸時代に編纂された『太宰管内志』、『肥前古跡縁起』などの資料にも記録がある。前述の史料記録と地元で伝わる伝説を併せて分析してみると、金立神社は非常に古い時代から徐福を金立大権現として祭り始めている。また、地元の徐福渡来伝説の歴史は古い。ただ、各史料が編纂された時代を考察すると、徐福が金立の地に渡来した話は、江戸時代に入ってから、一般庶民に熟知され、熱心に語り継ぐようになったと思われる。つまり、徐福伝説が地元で盛んに流布したのは江戸時代であろうと推測できる。

(2) 金立神社縁起図

正保 5 (1648) 年に描かれたといわれている金立神社所有の絹本淡彩「金立神社縁起図」(写真 11、徐福渡海縁起図とも呼ぶ)は、絹布 3 枚継ぎ、縦 181cm、横 107cm の掛け軸であり、現在佐賀県立博物館に展示されている。これは金立神社の祭神にまつわる絵画である。「金立神社縁起図」は上・中・下の 3 段に分けられている。上段は上宮の景観、中段は下宮の景観、下段は徐福が浮盃江(諸富町)に上陸したときの様子が描かれている。この絵画は由緒ある金立神社の信仰を研究するときには、高い価値がある歴史的資料であると考えられる。また、当該縁起図は、昭和 47 (1972) 年 2 月 11 日、佐賀県重要文化財に指定された。

江戸時代前期に描かれた「金立神社縁起図」には、往昔の金立神社上宮(写真 12)の壮麗な規模と徐福一行が浮盃江から渡来した様子が鮮麗に描かれている。縁起図の構図から、江戸中期には上宮の本殿、鳥居、「蓬莱島本地弁財天」、「護摩堂」、「本地薬師如来」などが配置されていることが読み取れる。縁起図では建築物が鮮やかな赤色で描かれており、当時の金立神社繁栄の様子がうかがわれる。江戸時代、非常に繁栄した金立神社だが、明治時代に破壊されてしまった。その盛衰について、坂田力三は「この神社の座主坊は雲上寺といったが、明治維新の折、廃仏毀釈の風潮で破却され、その余波が神社本殿にも及び明治中頃には小さな拝殿の奥に、自然石に刻み込んだ宝殿が残っていただけであった。現在の石造の神殿と拝殿は明治三十年代に建造されたものであり、これは他に類のない建造物である」(坂田 1980: 107) と述べている。このように、当時配置されていた「蓬莱島本地弁財天」と「本地薬師如来」などの建物も明治時代に壊された。



写真 11 金立神社縁起図 (佐賀県立博物館提供)

金立神社縁起図は、言うまでもなく、金立神社の縁起を絵図に描かれたものである。寺社の創建などの縁起が盛んに作成されたのは、中世や近世に入ってからのことだろう。久野俊彦は縁起について次のように述べている。

縁起とは、ものごとが何かの縁によって起こることという原義から、事物の起源や始まり、特に寺院の起源や来歴を意味する。仏寺におけ

る寺院縁起の影響で、神社でも鎮座創建の奇縁を示した祭神に関する神社縁起が作成された。縁起の内容には、過去から現在までの歴史的事実を順次記述した歴史的縁起と、中心的人物の活動の発端・展開・結末を逸話に盛り込んで描いた物語縁起がある。(久野 2009: 11)



写真 12 金立神社上宮 (2017年6月24日撮影)

金立神社縁起図は、江戸時代初期に描き出され、当時の金立神社の盛況を記録したものである。縁起図から、徐福渡来の伝説が当時、金立神社の由緒と結びつき、掛け軸という形で語り継がれていたことが垣間見える。これに関する詳細な記録はない。しかし、神社に関する者が祭りや特別な集まりのときに、信者たちに掛け軸を見せながら、神社の者が神社の由緒などを説明することがあったと推測される。縁起図は神社の由緒であり、掛け軸や絵巻物などのような形で描かれている。中世・近世には神社の氏子たちが信者などに絵解きをしたことがよくあったといわれる。金立神社でも金立神社の縁起を説く際には、掛け軸を見せていたのである。そして、徐福一行が浮盃江に渡来したことを契機に、弁財天女の加護に恵まれたこと、フロフキを手に入れたこと、後に金立の神、つまり金立大権現となり、今日に至っても祭られていることを順次に説明していったのであろう。現在、「金立神社縁起図」は佐賀県立博物館に保存されている。この縁起図が発見された場所は金立神社下宮である。博物館に移転される以前の縁起図は、掛け軸として信者たちに見せられた。その縁起図を用いて由緒が語られたと推測される。

(3) 「湧出御宝石」と「御湧水石」からなる陰陽石

金立神社本殿や拝殿などは破壊されたが、上宮の背後にある巨石「湧出御宝石」(写真 13) は現在も場所を変えずにそびえている。また、「金立山注書」の解題によると、金立神社は「はじめ社殿のうしろにある頂部に常に水をたたえた湧出御宝石を祭神とする農耕の神であったが、徐福伝説と結び徐福を祀るようになった」(神道大系編纂会 1987: 15) とされる。資料記録や口碑伝承では、徐福は金立神社の祭神であり、金立大権現ともいわれる。地元の人々からは「徐福さん」と親しみを込めて呼ばれている。金立神社の本殿などは歴史の流れの中で破却されたことがあった。しかし、金立神社のシンボルである湧出御宝石は神社創建されて以来、その繁栄と衰退を静かに見つめ続けているのである。

湧出御宝石について、地元では次のような興味深いことがあったという。

1988年秋、梅原猛先生が徐福のシンポジウム調査のために金立神社に来られた時、湧出御宝石を見られ、陰陽の考えのある中国の神仙思想がこの中にあると一目で徐福伝説を信じられました。これに相応しい陰石があるはずだと言われ、上宮より50m程下がったところに、どんな旱魃の時もきれいな水が湧き出ている大きな石があり、これではないかと神社の総代が案内したところ、まさしく陰石とうなずける石の割れ目から水がにじみ出ていました。土地の古老の話では、この神水をくみ取り、上、下宮の神社にあげている。戦争中は、出征兵士の家に、武運長久を祈り一升瓶に入れて持っていったということです。土地の人たちはあまりにも巨大なその石の姿に、男女を表す陰陽石とは夢にも思わずに梅原先生の指摘に驚かされていました。(村岡 2002: 15)

筆者は実地調査の際に、それぞれ澤野氏と大串氏らのご案内を頂き、2回その陰陽石を訪れた。確かに、梅原の指摘通り、上宮の後にある自然石の陽石である「湧出御宝石」を見つけ、50mほど下ったところに自然石の陰石である「御湧水岩」(写真14)も見つけることができた。先に言及したが、地元の水間氏は「この御湧水石あたりは、昔は蓬莱島といわれていました。そこには、徐福がフロフキを授かったという木造の弁財天があったそうです」と語っている。すなわち、口碑に語り継がれた徐福伝説は、1988年、梅原の「陰陽の考えのある中国の神仙思想」という指摘から、再び注目されるようになった。これはおそらく自然物を神の依代として崇拝した古い祭祀の形態(自然崇拝)であろう。



写真13 湧出御宝石 (『弥生の使者徐福』より)



写真14 御湧水石 (2017年6月23日撮影)

(4) 金立神社例大祭と雨乞い行事

金立神社では、徐福を金立大権現として古くから祭っている。佐賀県佐賀市で、「徐福さん」を祭る最も盛大な行事は、50年ごとに行う「金立神社例大祭」である。例大祭の由来に関する記録は不詳であるが、昭和55(1980)年の金立神社2200年例大祭では、金立大権現(徐福)の沖ノ島への渡り行事が行われた。

また、金立神社の雨乞い行事は古い時代から有名で、旱魃の際には藩主の参詣も行われた。江戸時代中期(1716年ごろ)に書かれた『葉隠』には正徳3(1713)年に雨乞い行事が行われた記録があ

る(山本 2017: 83)。近年行われた雨乞い行事は、昭和 14 (1939) 年の早魃時のことであった。実地調査の際に、地元の人々は雨乞い行事が行われるようになったきっかけについて、次のように語ってくれた。「徐福は非常に金立の地が気に入り、しかもお辰との恋もあり、それでもう秦に帰りたくないと思っている。しかし、雨乞い行事を行うとき、徐福の御神体が金立神社上宮から有明海に運ばれると、徐福は秦に帰されるのではないかと思ひ、妨害のために雨を降らせるのだ」と。

昭和 55 (1980) 年に執行された金立神社 2200 年例大祭については、坂田力三の「金立神社二千二百年大祭余録」に詳細に記録されている。それによると、例大祭は次のような様子であった。



写真 15 神輿を担ぐ氏子たち
(『佐賀に息づく徐福』より)

4月27日は金立神社上宮本殿にて祭事が執行され、中宮を経由して下宮まで下山する。下宮で前夜祭が行われ、千布の伝統芸能である浮立が奉納された。28日は本祭の「お下り」と「お上り」が行われた。「お下り」については、次のような行事が行われた。金立神社下宮にて神事が行われ、上宮から下った徐福の御神体は、お祓いを受けて下宮で神輿(写真15)に収められ、青年氏子に担がれる。下宮から約1500mの徒歩大行列(写真16)が千布のお辰観音堂へと向かって出発する。観音堂より出たお辰と再会した後、上陸地である金立神社寺井下宮まで運ばれる。金立神社寺井下宮で沖ノ島へ渡り神事が行われた。

当時の行列配置人員は27種類あり、人数最多の3種は神輿を担ぐ氏子25名、稚児75名、石楠花の花をかざして行列の最後で踊りながら進む婦人会80名である。総勢300余人の大行列が延々と200mも続き、昔のままの袴、陣羽織、稚児行列、最後を地元婦人会の手踊隊が徐福伝説を織りこんだ歌に合わせて踊りながら千布のお辰観音へと進んで行く姿とその衣裳が花をそえ、一大絵巻を展開した。

また、金立大権現「お下り」は、上宮→下宮→千布のお辰観音堂→新北神社→浮盃の寺井下宮というルートで行われた。「お上り」とは来た道に戻る。すなわち、浮盃の寺井下宮より全行程、車両にて金立神社下宮へと上ることである。

29日は金立神社下宮にて還御の神事後、中宮までの約1000mの行程を、千布の浮立を先頭に、厳かに出発した。御神幸行列は中宮まで上り、第2日目のお辰観音堂までの「お下り」行列と同じ行列配置である。その後、金立大権現の御神体の上宮還幸が行われた。2200年金立神社例大祭は3日間に亘る盛大な祭りである。(坂田 1980: 114-120)⁽¹⁴⁾

2200年の歴史を持つといわれている金立神社では、往古から徐福を大権現として祭っている。雨乞い行事と50年ごとに行われる金立神社例大祭は、古くからの習わしとして定着している。このことは地元の人々が確実に徐福信仰を伝承していることを証明している。また、雨乞い行事と例大祭のような祭祀活動は、地元の人々が徐福への特別な感動を呼び戻す契機となっているといえるだろう。



写真 16 金立神社 2200 年例大祭行列（『佐賀に息づく徐福』より）

おわりに

中国の歴史書では詳細が記載されなかった、徐福の東海にて仙薬を探す歴史的事件から、日本でさまざまなロマンを持った伝説が生じた。佐賀県佐賀市は九州の徐福伝説ゆかりの地の一つとして、古くから伝説のロマンが地元で語り継がれている。本論文では、佐賀市での実地調査と文献資料などの分析に基づき、今日伝えられている徐福伝説の実像とその伝承形式を探った。

佐賀市の徐福と関わりがある伝説は七つに分けられる。それは、①徐福上陸地、②地名の由来、③片葉の蘆とエツ、④ビヤクシン伝説、⑤仙薬フロフキ、⑥お辰との悲恋物語、⑦金立大権現である。本論文では、佐賀市に伝わる徐福伝説を個別的に考察した。この七つの伝説を連ねて分析してみると、徐福一行の上陸から金立山に至るまでの仙薬探しの物語が順次に展開されていることが分かる。

このように、これらの伝説は発端から結末まで完全なストーリーを構成しているのである。このことは、徐福の上陸から仙薬探しまでの伝説の地が、この物語に関する知識を持った人たち、あるいは金立神社の氏子や信者たちの介在によって、作られてきた可能性を暗示している。縁起図は下宮で保存されていたとき、金立神社の由緒にあたる主祭神の徐福渡来のストーリーを信者たちに絵解きするのに使われたであろうと推測される。佐賀市での徐福伝説が物語のように展開されていることは、偶然のことではない。つまり、なんらかの意図を持った宗教者や、力を持つ人たちの活動の結果、このような物語が金立山を中心に展開しているのだと考えられる。

佐賀市に伝わる徐福伝説を総合的に考察すると、地元で古くからある徐福信仰と切っても切れない関係がある。地元の信仰を集める金立神社では、徐福は金立大権現として古い時代から祭られている。このような信仰の源があるからこそ、徐福は地域の人々にとって、影響力を持つ特別な存在と認められている。そうした徐福の大きな影響力が、初めは徐福と関連性を持たなかったさまざまな伝説や地名由来の主人公が徐福に取って代わられた理由であると考えられる。佐賀市では、片葉の葦やエツなどにまつわる伝説の主人公の多くは徐福であるとされている。これは徐福信仰という信仰的な背景を基にしているものである。そのため、徐福は古くから地名由来として認められ、今日でも語り継がれることになったと考えられる。

さらに、筆者の考察によると、徐福渡来の伝説は地元において、江戸時代に入ってから、人口に膾炙するようになった。つまり、徐福伝説が地元で盛んに流布した時代は江戸時代であろうと推測される。特に、地名としての定着や徐福伝説と関連がある事物の建立や郷土資料の記録などは、江戸時代の徐福伝説が流行した様相を描き出した。

江戸時代から民間伝承として伝わる徐福伝説は、関連する事物によって、地元の人々に記憶として

刻み付けられている。雨乞い行事と金立神社例大祭が行われる時期になると、徐福伝説にちなんだ事物は、その伝説に対する記憶を思い出す糸口となり、古くからの徐福信仰の記憶を呼び戻しながら、また新たな信仰の記憶を構築する。このような役割機能を持つため、地元の人々は、これらの事物を大切に守り続けているのであろう。筆者には、それらの事物が、現在ある場所で、古くから伝えられてきた徐福伝説を代々、静かに語ってきたように感じられる。これは、おそらく佐賀市における徐福伝説の伝承形式であろう。徐福伝説は時代の移り変わりによって変化している。だが、人々の徐福信仰は口碑の言い伝えの中から生まれ、既に地元の人々の生活と融合した。伝説はロマンを呼び起こす。ロマンと捉えているからこそ、佐賀市では、古い時代から徐福を祭るさまざまな行事が中断せずに行われているのであろう。

注

- (1) 方士とは、中国古代において医術・占筮・天文・神仙の術などの技術に精通する人を指す。
- (2) 原文のまま引用し、私意により、句読点と（）の内容を付した。
- (3) 2017年6月23日、諸富町での、澤野隆氏からの聞き取り調査による。
- (4) 筆者は実地調査の際に、万福寺所蔵の「寺井由来」の有無とその内容を確認できなかった。本論は坂田力三の「金立神社二千二百年大祭余録」の記述を参照として、筆者が加筆した。
- (5) 筆者が佐賀市で実地調査を行ったのは2018年2月という冬の時期であったため、緑色の葦の写真は撮れなかった。本論文に載せた緑色の葦の写真（写真3）は徐福長寿館の職員である東島邦博氏よりご提供いただいたものである。
- (6) 『佐賀新聞』2010年4月30日の記事を参照した。
- (7) 『佐賀新聞』2008年6月2日の記事を参照した。
- (8) 2018年1月31日、新北神社での、川浪勝英宮司からの聞き取り調査による。
- (9) 『佐賀新聞』2010年4月30日の記事を参照した。
- (10) 『佐賀新聞』2008年7月21日の記事を参照した。
- (11) 2018年2月1日、金立神社下宮での、水間祥郎氏からの聞き取り調査による。
- (12) 原文のまま引用した。引用文は「玄蔵」と書いているが、源蔵と同じ人物である。
- (13) 2018年2月5日、諸富町東搦公民館での、大串達郎氏からの聞き取り調査による。
- (14) 昭和55（1980）年に執行された金立神社2200年例大祭に関する内容は、坂田力三の「金立神社二千二百年大祭余録」に、他の資料を併せて加筆しまとめた。

参考文献

中国語文献（アルファベット順）

彭雙松 1984『徐福研究』高蕙図書出版社

呉傑 1988『全国第一回（首届）徐福学術討論会論文集』中国鉱業大学出版社

日本語文献（五十音順）

伊藤常足 1989『太宰管内志 下巻』文献出版

梅野光興 2000「解釈の技法・記憶の技法：高知県大豊町の蛇淵伝説」小松和彦編『記憶する民俗社会』人文書院

梅原猛 2001『梅原猛著作集5 古代幻視』小学館

大串達郎 2005「佐賀と徐福：佐賀平野の徐福伝説」『徐福さん：伝承地に見る徐福像と徐福伝説』徐福友好塾

北島磯次 1929『九州行脚 第三巻 金立山めぐり』佐賀堂文庫

- 久野俊彦 2009『絵解きと縁起のフォークロア』森話社
 経済雑誌社 1897『日本三代実録』『国史大系 第四巻』経済雑誌社
 近藤瓶城 1976『歴代鎮西要略』上巻 文献出版
 佐賀県 1926『佐賀の栞』佐賀印刷社
 佐賀県神職会 1926『佐賀県神社誌要』佐賀県神職会
 佐賀県立図書館 1974『佐賀県史料集成 古文書篇 第15巻』佐賀県立図書館
 佐賀県立図書館 2014『佐賀県近世史料 第十編第三巻』佐賀県立図書館
 佐賀市 1994『太古のロマン 徐福伝説』佐賀印刷社
 佐賀市教育委員会 1983『金立・久保泉地区文化財要覧』佐賀印刷社
 佐賀市文化財編集委員会 1962『佐賀市の文化財』佐賀市教育委員会（非売品）
 佐賀市立金立公民館 出版年不明『ロマンの里 金立地区の文化財』
 佐賀植物友の会 2007『佐賀の植物方言と民俗』佐賀印刷社
 坂田力三 1978「徐福伝説とその周辺」『佐賀民俗学』第2号
 坂田力三 1980「金立神社二千二百年大祭余録」『佐賀民俗学』第4号
 小学館 1985a『日本大百科全書 3』小学館
 小学館 1985b『日本大百科全書 5』小学館
 徐福キャンペーン事務局 1989『ノート 弥生の使者徐福』西日本新聞社
 神道大系編纂会 1987『神道大系 神社編 45』精興社
 谷川健一 2011『谷川健一全集 第十五巻 地名二：地名伝承を求めて 日本地名研究所の歩み』富山房インターナショナル
 田主丸町誌編集委員会 1996『田主丸町誌 第一巻 川の記憶』田主丸町
 内藤大典ほか 1989『弥生の使者徐福：稲作渡来と有明のみち』東アジア文化交流振興協会
 日本水産広報室編 1986『魚資料 II 魚の生態・風俗誌等』日本水産株式会社
 日本放送協会 1950『日本伝説名彙』日本放送出版協会
 能勢幸雄ほか 1989『魚の事典』東京堂出版
 範曄撰、吉川忠夫訓注 2005『後漢書』第十冊 列伝八』岩波書店
 肥前史談会 1973『肥前叢書』青潮社
 真崎実央 1987「雲上寺と金立山」『歴史研究』第316号
 松江正彦ほか 2010「巨樹・老樹の保全対策事例集」『国土技術政策総合研究所資料』第566号 国土交通省
 三谷菜沙夫 1992『徐福伝説の謎』三一書房
 村岡央麻 2002『佐賀に息づく徐福』佐賀県徐福会
 森浩一 1989『図説 日本の古代 第1巻 海を渡った人びと』中央公論社
 柳田国男 1990『柳田国男全集 7』筑摩書房
 山本常朝述、田代陣基筆録、菅野覚明ほか訳・注・校訂 2017『葉隠：新校訂 全訳注（上）』講談社

新聞記事（日付順）

- 「寺井の地名の由来に」『佐賀新聞』2008年6月2日「徐福を歩く」特集
 「妙薬<フロフキ>を授ける」『佐賀新聞』2008年7月21日「徐福を歩く」特集
 「新北神社のビャクシン」『佐賀新聞』2010年4月30日「のこしたいさかの木」特集